宮脇綾子《はりえ日記》について②

ー第4巻から第6巻までー

西﨑紀衣

本稿では『豊田市美術館紀要』No.10（2018年）に引き続き、創作アプリケ作家・宮脇綾子（1905-1995年）の《はりえ日記》（1972-90年、70冊）の第4巻から第6巻までの記載を起こしたものと、各該当頁の画像とを併せて掲載する。

約20年の間ほぼ毎日綴られ、貼り続けられた《はりえ日記》は、宮脇綾子のライフワークともいえる作品である。豊田市美術館では、2017年度の博物館実習の一環として《はりえ日記》の第1巻から第6巻までを文字に起こす作業を行った。6名の実習生※がそれぞれ1巻ずつを担当し、作家と作品および取り扱い方を事前の授業で学び、筆者を含む学芸員立会いの下、作業にあたった。記載がくずし字であり、学生たちには不慣れな旧仮名遣いや旧字体、異字体が含まれるため、1冊全てを起こし終えることは目標とせず、定められた時間内で行いうる範囲とした。本稿掲載の日記各巻は、学生が文字に起こした資料を校正し、学生が着手にいたらなかった後半については筆者が作業を行い、作業の終了後に、作家ご遺族に内容を確認いただいた。ご遺族との連絡、補足説明の聞き取りや記載内容の修正等は成瀬美幸が行った。

本稿で掲載する日記は下記の通りである。

はりえ日記　4巻：1973（昭和48）年 7月13日ー 9月 4日、45頁
はりえ日記　5巻：1973（昭和48）年 9月 5日ー10月20日、43頁
はりえ日記　6巻：1973（昭和48）年10月20日ー12月 2日、43頁

《はりえ日記》第1巻から第3巻までの書き起こしについては、『豊田市美術館紀要』No.10（2018年）を参照されたい。

昨年度にひき続き、宮脇実保子氏、山川由美氏、嶋地奈美氏には多大なるご厚情を賜りました。あらためて心よりお礼申し上げます。

※2017年度豊田市美術館博物館実習生：井関千絵、岡本亜季、谷崎壮太朗、長坂有紗、長田詩織、山際妙子（五十音順）

凡例
・本文中の旧仮名遣い、旧字体、異字体、踊り字は原則として原文のままとした。
・本文中のカッコ等の記号は、原則として原文のままとした。
・レイアウト上の細かな改行は1行にまとめた。
・文章末の日付やサインは、行の下揃えとした。
・人名については註釈で解説しているが、一部調査が行き届かなかったものがある。

第四巻

中表紙

思いつくままに（四）

四十八年七月十三日　より
九月四日　まで

四巻　二―三頁（図1）

生地にしてあるのは
杉村春子さんから
いただいたもの
「朝鮮の麻」
この麻で私の帯を
作る

葉のついて居るのが
面白いと思ったので―
『すもゝ』

七月十三日　作る
あ

四巻　四―五頁（図2）

冨士通さんから貰った
北海道産メロン

七月二十一日

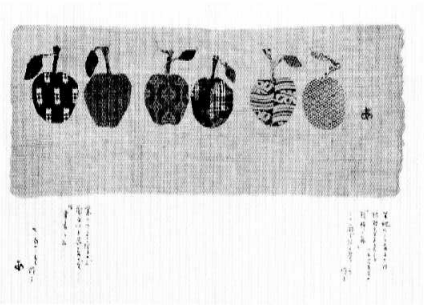

図1　四巻　二―三頁

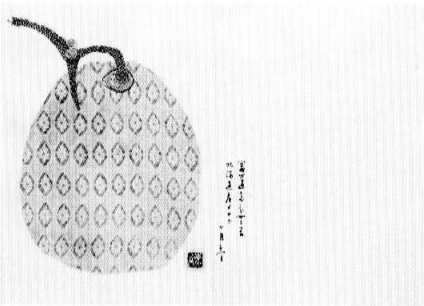

図2　四巻　四―五頁

四巻　六―七頁（図3）

硝子鉢の
すもゝが
美しい

八月ママ二十二日　つくる

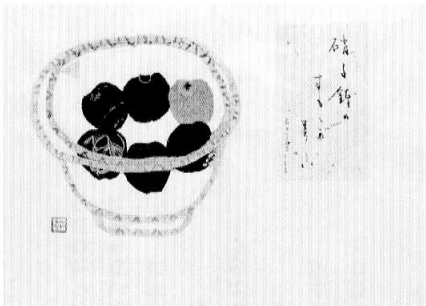

図3　四巻　六―七頁

四巻　八―九頁（図4）

『うど』

（古い作品）
七月二二日
ここに貼る

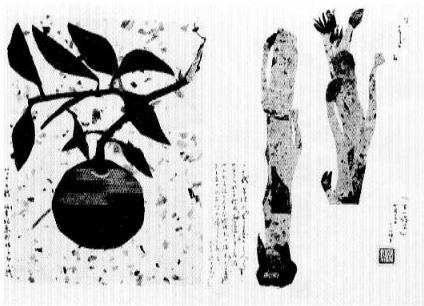

図4　四巻　八―九頁

この紙　中津川『長多喜[2]』の主人より貰う
茶を入れる袋と色濃きところ渋
一かかえ位の大きな袋五つ位を『どうぞ』と
さし出された時の嬉しかったこと
十年以上前のこと

バックの紙　岐阜縣恵那坂下町[3]の紙

四巻　一〇―一一頁（図5）

一本の線

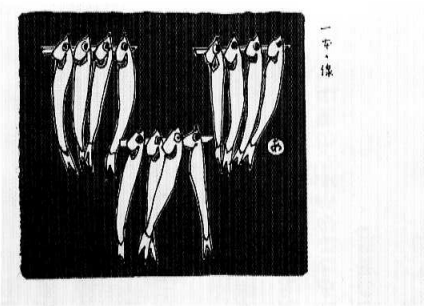

図5　四巻　一〇―一一頁

四巻　一二―一三頁（図6）

私が鋏を持つと
干柿を切るか
魚を切る
どうしてだらう
長い間に
知らない中に
くせ見たいなものに
なって終ったのだらう

この二枚古い作品
箪笥の中から出て来たもの

四巻　一四―一五頁（図7）

思いがけない布が
おもいがけなく生きる
美しさ

七月二十六日
ここに貼る

四八. 七. 二二. つくる

四巻　一六―一七頁（図8）

『三ヶ日の蜜柑』
額に入れるとこのバックの藍の
両耳が見えない　耳を見ると手織りか
機械織か判る

昨年十月三十一日
静岡県三ヶ日町
稚月浜名園にて
東海放送番組
懇話会あり

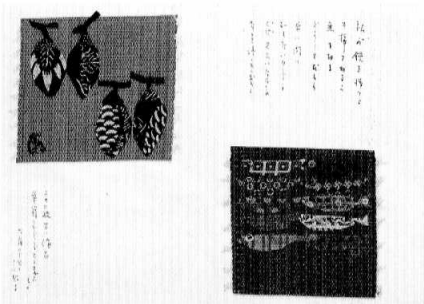

図6　四巻　一二―一三頁

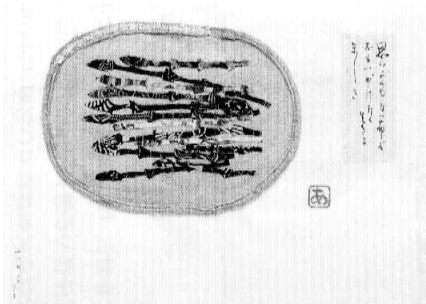

図7　四巻　一四―一五頁

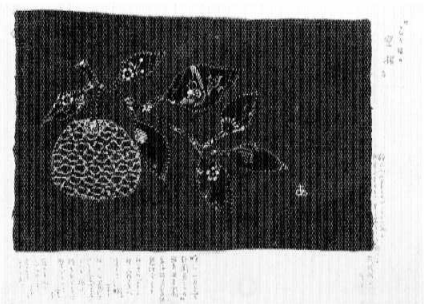

図8　四巻　一六―一七頁

みかんがりの
時　宿の主人から
葉のついたのを
貰う
みかん園では
いくら食べても
よいが、外に
持ち出すことは
禁じられて居るので
宿の主人に
モデルにしたいからと
言ったら
下さった。

四巻　一八―一九頁（図9）

うちの庭からよく蝉がとび立つ
せまいけれど
やしきのまわりに圍いがわりに
木が植えてあるからだらう
庭に出て見たら柿の葉のうらに
せみのぬけがらがくっついて居た
自然というものゝ神秘さを
こんなせまいところで見つけた事が
とても嬉しい

どんどん自然を破かいされる
なげかわしいこのごろ
七．三一．

四巻　二〇―二一頁（図10）

『のうぜんかづら』

うちの庭に　この樹がある
この家を建てた頃
（今から三十年位前）
人さしゆび位のつる草だったのが

図9　四巻　一八―一九頁

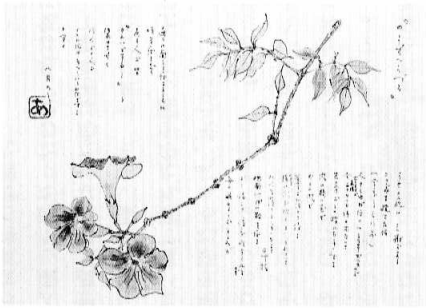

図10　四巻　二〇―二一頁

木の直径が
今二十センチ位の木ママなって
先の方がこの様になって居る
風に弱い花で
少しの風で
蕾まで落ちて終う
ちょっと強い風が吹くと　それこそ
みんな落ちてしまったかと思う程
地面一ぱい散って居る
でも後から　後から　咲いてくれるので
毎日眺めるのが楽しみだ

通りに面して居るところに
咲いて居るので
通る人が皆
『きれいですねー』と
褒めて行く
殆んどの人が
この花はなんという花ですか
と聞く

八月二日

四巻　二二―二三頁（図11）

『柳茸』
家の門の側に、柳の木がある　その柳が不思議で
皮だけになって生きて居る　それも縦半分になって―
植木屋さんに聞いたら　大丈夫ですよ　ちょっと肉がついて居るからと
この柳は　のうぜんかづらを植えた時と同じ頃、
ステッキ位の太さの枝をさして置いたのが、今では、
家の目じるしになって居る　『大きな柳の木のある家』と
私も私宅を訪れる人に、そう言う
昨年のたい風で倒れたのを起して　上の方を切って針金で
鉄柱にしばって置いたら　今年切り口のところから枝が延びて来た
この柳が皮だけになったのは五年前で　丁度主人が胃の
手術で入院した時だったので、私は気になって人知れず
祈るような気持ちで居た

図11　四巻　二二―二三頁

お蔭様で主人は
細々ながら　この暑さに
負けず　毎日制作して居る

その柳の下に生えて
居る茸を今日見つけた
何時ぞやも生えたことが
あるが
植木屋さんは「これは
柳茸と言って、美味しい
ですよ」と言ったけれど
食べたことはない
私は一人で
これは『芽出た茸』と
決めて居る

八月四日

四巻　二四―二五頁（図12）

『一ヶ月前にもと子さんから貰った
ぶどう』

もと子さんが
自分の家の庭に
実ったと
•••
まっさをの葡萄を
持って来て下さった
何と美しい色……
と思うも
その頃、展覧会、
放送のことなどで忙しく
どうしても
モデルにする事が出来ない
仕事部屋の
机の上に置いては
眺めて居る中に

図12　四巻　二四―二五頁

だんだんしなびて来た
そのしなび方が
又　美しいので
その儘にして居る中に
今日になって終った
忙しいことに変りはないが
思い切って
これをして見る
もういろも形も
干葡萄そのものに
なって居る
蔭の方を
ためしに摘んで
食べて見たら
何んと不味い!!
味もそっけも
ない。

八月四日
あ

四巻　二六―二七頁（図13）

『さやいんげん』　縞を使って

八月六日

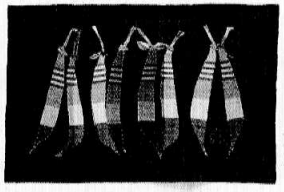

図13　四巻　二六―二七頁

四巻　二八―二九頁（図14）

萬里[5]を連れて、毎朝散歩。主人が引っぱって、私は糞とり。
それがもう七年になる。この近くにお住いのある片山五郎[6]さんが
『これは表彰ものですねー』と仰言った。私が糞の仕末をするからだらう
その片山さんも先日急に亡くなった。
犬の散歩と言っても私たち夫婦のてい・・・のいい散歩とも言える。足から年をとる
というので―
散歩の道もコンクリートになり　ところどころあった原っぱも
家が建ったり　駐車場になったり[ママ]終った。土のあるところは犬も喜んで
入りたがる　土を踏むことを好むのは人間と同じだ
家からしばらく行ったところに坂道[ミチ]がある　その横に雑木林があって
木の美しさを主人と褒めたり　それを楽しんで居たが　最近その木々も
伐られ、ブルドーザー[ママ]入って　土をならして居る
あゝなんという自然の破壊よとなげきながら　段々変って行くその様子を
うらめしく見ながら通って居たが、二三日前　その土地の隅の雑草の中に
この昼顔を見つけた
嬉しさとあはれみと
ごっちゃな気持で
これを取って居た
その日は描く暇が
無かったので
今日、取ったのを
描く

あ

『道に咲いて居た昼顔』

八月八日

四巻　三〇―三一頁（図15）

『はたはたのひもの』

八月十九日作る

図14　四巻　二八―二九頁

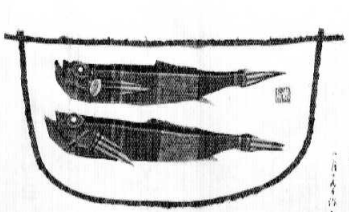

図15　四巻　三〇―三一頁

四巻　三二―三三頁（図16）

（北海道南瓜）
たかちゃん[7]のお母さんから貰ったもの

八月二十二日　作る　あ

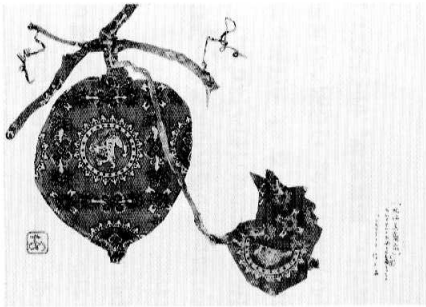

図16　四巻　三二―三三頁

四巻　三四―三五頁（図17）

『京都の錦どおりで買った茄子』

「昨日
『中華人民共和国
出土文物展[8]』を
見がてら由美、奈美[9]を
連れて京都へ行く
はじめ　東寺の露店を
あさって　又布を
いろいろ買う
それから博物館[10]で
中国展を見る
今更ながら中国から
受けた日本への文化の
影響思う
いろいろ私は私なりに
勉強になった
美濃吉[11]で『吉山べんとう』
をとり
そこから車で
中村ちんぎれ屋[12]さんに行き
沖縄の芭蕉布の

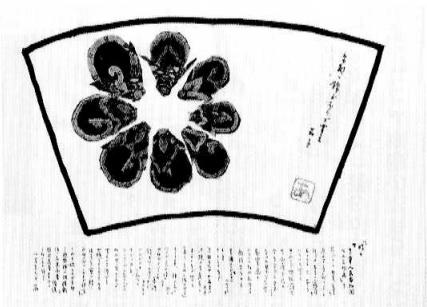

図17　四巻　三四―三五頁

きものなど買う
（委しい事は　日記に書く）
そこを出て　錦どおりに向う
空が急に暗くなる
四時だというのに真暗
錦通りの近くまで来たら
ごろごろとかみなり
すごい夕立
アーケードがあるので
ぬれはしなかったが
買ものを済ませて
四條でタクシーを大分
待ってから乗り駅へ
六時三分のこだまで帰宅」

これを作り上げた時
高校野球の決勝戦が
県立広島商業優勝
静岡商業負ける
三時十五分終了

八月二十二日　あ

四巻　三六―三七頁（図18）

毎朝
犬と散歩する道によく見る露草　この前一度取って来て写生
仕様と思ったが、この花はというより　雑草の花は大体水持がわるい
今朝は早速スケッチをする。色を塗るだけを残して―
朝食を済ませてから見たら　もう花も葉もしぼみかけて居た。
スケッチして置いてよかったと思いながら　色を塗る。　私たちはものを見る時
美しいとか　きれいだとか
何げなしに見て居るのだと何時も思う。
ものをよく見ることの
大切さをしみじみ思う

八月二十七日
午前十時

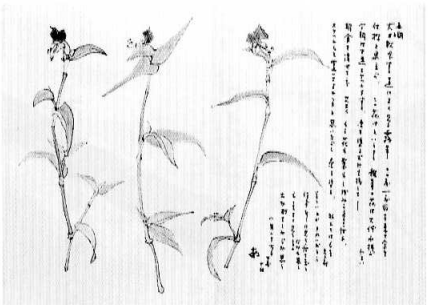

図18　四巻　三六―三七頁

四巻　三八―三九頁（図19）

これは私の好きな作品
五年位前に作ったものだが
今日箪笥の引出しから出して見て
ここに貼る。何か貼って見たくなって
毎年夏のはじめになると
どくだみの白い花を見るのが楽しみだ
それを見るとどうしても作りたくなる
どくだみも段〻少なくなって
近所の湿気の多い一ヶに生えるところが
あったが
そこもコンクリートでかためられ自動車置場になって終った
この頃は、中津川の山の家に
行った時か　誰かが持って来て下さるのを
見ては作る　昔から私の大好きな花……

これが一番小さく
これが中位で二つ同じ
下が一番大きい

ものの本に
十字花と書いてあるのもある

私がどくだみをつくりはじめて
随分月日が立ってから花と思って
居たのはがくで　真中に
黄色のが小さい花の集まりだと
言うことを、図鑑で知った

八月二十七日　記

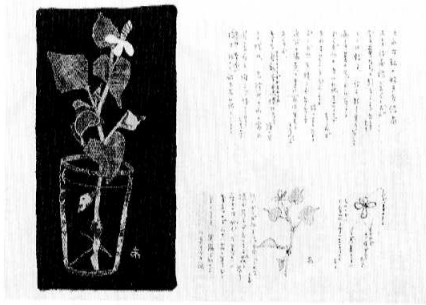

図19　四巻　三八―三九頁

四巻　四〇―四一頁（図20）

この花は『西洋ふうちょう草』と図鑑に載って居るけれど
或るおとしを召した方が
これは『おいらん草ですよ』とおっしゃった
庭に三本（加藤美代子[3]さんが苗を下さったのが）

図20　四巻　四〇―四一頁

今　真盛りに咲いて居る　昼間は色が全体薄桃色だけど
夕方になるとふしぎと上の方が紅色となり　その下が真白になる
それにしべがはっきりと見えて来る
まさしく日暮れにおしろいをつけ　紅をさし　かんざしをさした
おいらんの姿を思わせる　私は自分で勝手に
これは『おいらん草』だと一人決めて、
毎日見るのを楽しんで居る

これを描いたのは五時ちょっと過ぎ
描いて居る中に　その美しさを増して行くのに
気がついて驚く

八月三十日描く

四巻　四二―四三頁（図21）

（加藤美代子さん提供）
『今日モデルに使った　いちじく』
二ヶ月振りに家のけいこはじまる

（九月四日）

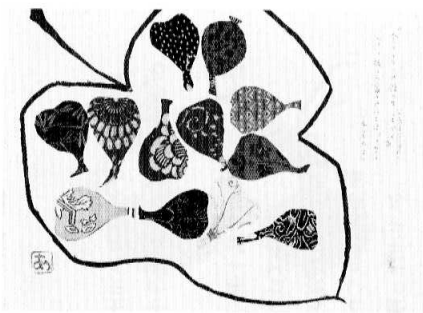

図21　四巻　四二―四三頁

四巻　四四―四五頁（図22）

岐阜縣之谷産　たかちゃん提供
『長茄子』

（九月四日）

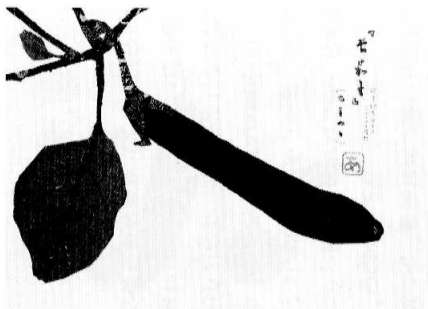

図22　四巻　四四―四五頁

第五巻

中表紙

思いつくままに

四十八年九月五日　より
〃　　十月二十日　まで

五巻　二―三頁（図23）

昨日けいこをした後
その日使ったモデル
長茄子といちご二点を
作ったら夜になったので
そこを片づけずに
その儘　布一ぱいを散らしっぱなしで
寝る
今朝のその部屋の中でこれを作る
昨日のモデルの中のものから

九月五日

図23　五巻　二―三頁

五巻　四―五頁（図24）

今日おたしみ[ママ]教室に久し振りに行ったら
けい場[ママ]の松永さんが
田舎へ行って貰って来たというこの冬瓜を
モデルにして見えたので『まあ　いいわねー』と
言ったら　帰りがけに『どうぞ』と
私に下さったので　私はこおどりしながらいただき　家に帰って早速これを作る
夜更けまでに　この他二点　これと同じ絣と（バック酒袋）
藍型染の麻の葉の柄で（バック紺の生地）布の上に構図をする

九月十二日

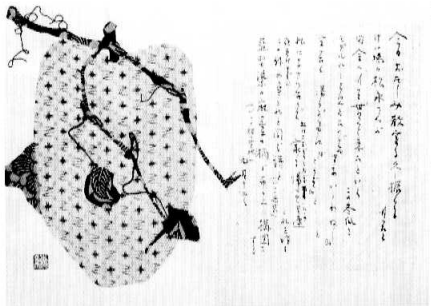

図24　五巻　四―五頁

五巻　六―七頁（図25）

佐分[14]さんのお宅の庭で実ったのを
いたゞく　佐分さんは　これを『日本レモン』と
仰言る（今日一の宮[15]のけいこ場で）

五巻　八―九頁（図26）

『藁で結んである玉ねぎ』
一の宮のけいこ場で女医の
加茂さんからいたゞく

九月十三日

五巻　一〇―一一頁（図27）

（高山のとうがらし）

松坂屋友の会の
けいこ場にて
会員の人より

（だいだい）
一の宮の佐分さんより

（九月十四日　写　あ）

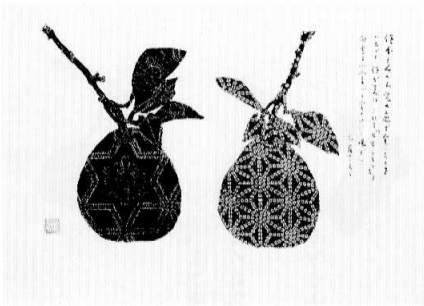

図25　五巻　六―七頁

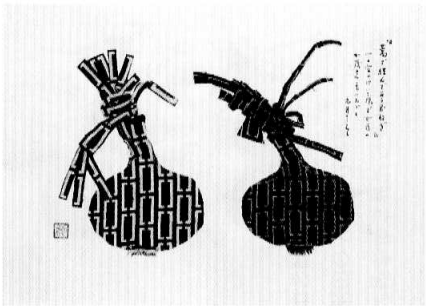

図26　五巻　八―九頁

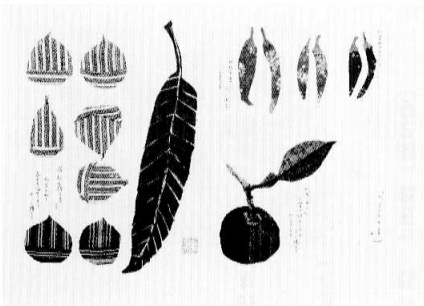

図27　五巻　一〇―一一頁

けいこ場にて　九月十三日

服部露子さんから
毎日文化センター
けいこ場にて　九月十四日

五巻　一二―一三頁（図28）

佐分さん宅からいただいた二種類の
柑を　先日のと違った布で
敬老の日の翌日　九月十六日

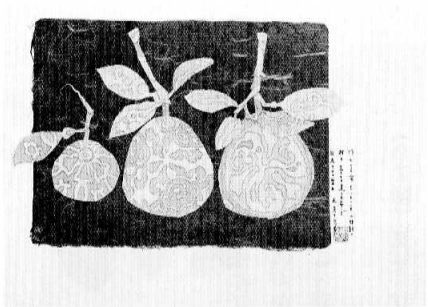

図28　五巻　一二―一三頁

五巻　一四―一五頁（図29）

『はっさく』
松坂屋の友の会の会員提供　九月十六日

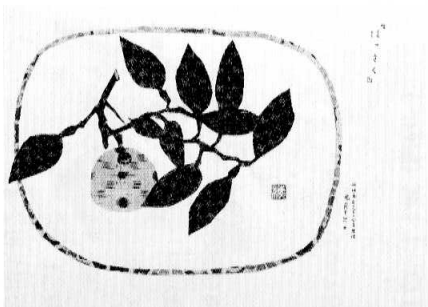

図29　五巻　一四―一五頁

五巻　一六―一七頁（図30）

『あけび』
高山の朝市[16]で買う
河岸の露店にて
（二枝五十円也）
雨降る九月二十二日

九月二十五日　貼之

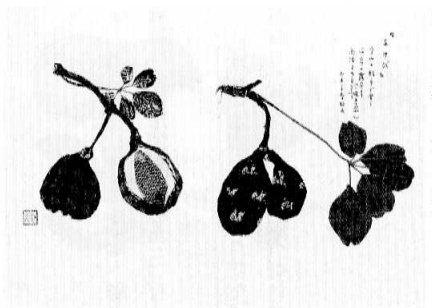

図30　五巻　一六―一七頁

五巻　一八―一九頁（図31）

『ひょうたん』
飛騨の高山の朝市で買ったもの
九月二十二日　陣屋前の広場にて（一つ五十円也）
（実物は薄みどり）

九月二十五日　貼之

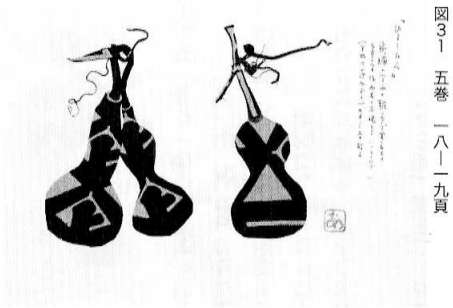

図31　五巻　一八―一九頁

五巻　二〇―二一頁（図32）

『茄子』
飛騨の高山の河岸の朝市の露店で求む
（一ならべ　百円三十五ケ）
この塩づけを桂[17]の家で食べて美味しかった
買ったのが九月二十二日　今日で四日目　これからこれを漬けて見よう

九月二十五日　貼之

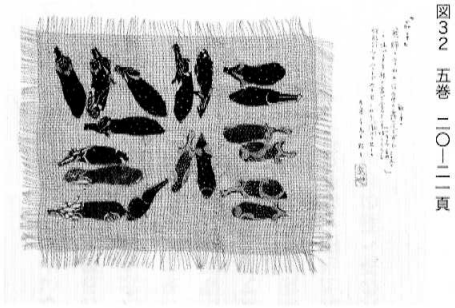

図32　五巻　二〇―二一頁

五巻　二二―二三頁（図33）

新らしいいわしが見つかったので　料理をする前に
一尾モデルにした　一週間前の作品。

昨年の十月に三ケ日に東海放送番組懇話会で遊び
に行った時　ホテルで貰ったみかん。今日筆筒からさがし出して。

九月二十七日　貼之　あ

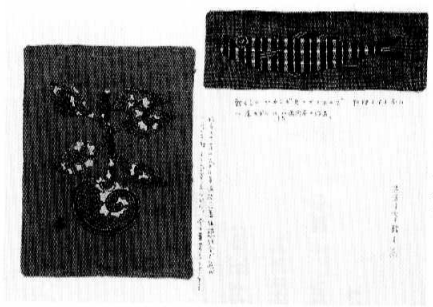

図33　五巻　二二―二三頁

五巻　二四―二五頁（図34）

家の庭のざくろが　今年今までない程
澤山実がなった　でもこれは
びっくりする程すっぱいので　鑑賞用か
モデルにしかならない。
昨日枝を切って来た中の一つを　ちょっと貼って見た

九月二十八日

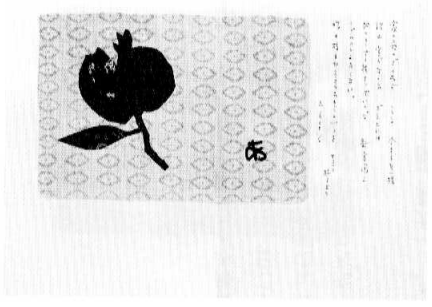

図34　五巻　二四―二五頁

五巻　二六―二七頁（図35）

以前主人の所へ画のけいこに
来て見えた松田さんが来宅
この頃菜園をやって　こんなものが出来たと
持って来て下さった
我が家の雰囲気が好きだとしきりに言って
又遊びに来ていいですかと
帰り際に念を押して居た　来年大学を卒業する
息子がある奥さんなのに　眞紅なセーターを着て
可愛らしい人（少女がそのまゝ大きくなった感じ）

十月三日記す

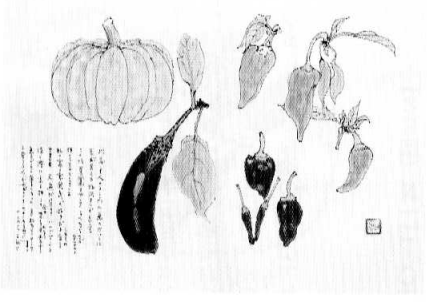

図35　五巻　二六―二七頁

五巻　二八―二九頁（図36）

『松茸』

『香茸』

竹内和子[18]さんからの
おくりもの

十月三日　貼之

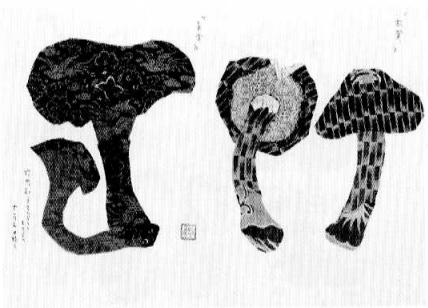

図36　五巻　二八―二九頁

五巻　三〇―三一頁（図37）

『ねぶりこ飴』

ねぶりこぺろぺろ　　たぬきが出たよ
たぬきぺろりと　　うさぎになった
わらに澤山　　おまつり見たい
ねんねんころりと　　お祭り見たい
せなかの赤ちゃん　　ちょっぴりなめた
ちょっぴりなめたら　　かえろうね
おしゃぶりぺろぺろ　　かえろうね

飛騨地方では、おしゃぶりのことを
『ねぶりこ』と呼びます。手造りの
おもしろさ
素朴な味わい。　響愁を誘う
わらべ唄のようなあめです
先日高山へ行った時　買って来たもの
（ビニールの袋に右の様なことが印刷してあった）

『ねぶりこ』

（十月六日　写之）

図37　五巻　三〇―三一頁

五巻　三二―三三頁（図38）

『あけび』
（岐阜県八百津久田見[19]の産）
（多禾ちゃん[20]提供）

十月八日　写生

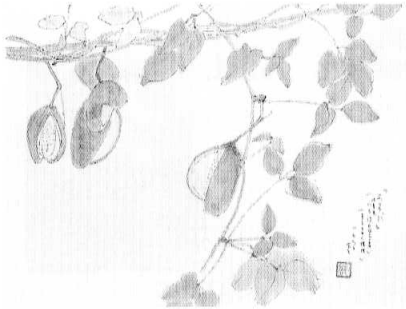

図38　五巻　三二―三三頁

五巻　三四―三五頁（図39）

『あけび』
（八百津久田見の産）
たかちゃん提供

（実物の葉
何時までもつやら）

十月十日　写之

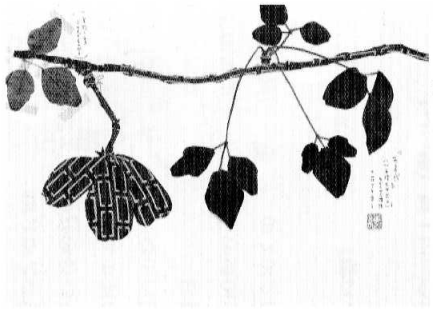

図39　五巻　三四―三五頁

五巻　三六―三七頁（図40）

『はぜ』

二十年前の作品
これを貼った色紙に澤山の
しみが出来たので　それをはがし
ここに貼る

（十月十二日）

図40　五巻　三六―三七頁

五巻　三八―三九頁（図41）

九月二十二日　飛騨の高山の朝市で買った
『ひょうたん』河岸の市で買ったのは薄みどりのままだが
翌日の陣屋前の市で買ったのは　口の方から
だんだん茶色になって来て居る
この布　稲沢の山内さんからずっと前に貰ったもの

十月十四日写之

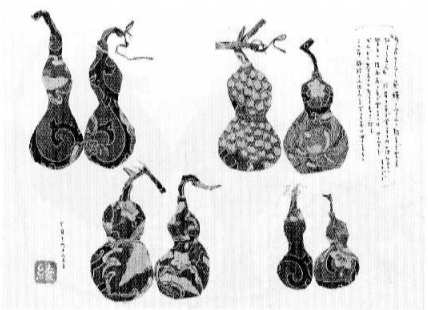

図41　五巻　三八―三九頁

五巻　四〇―四一頁（図42）

『しなの柿』
花がきとも言う
姫部志かさん提供

十月十五日写生

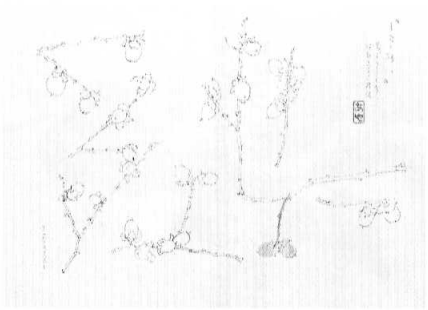

図42　五巻　四〇―四一頁

五巻　四二―四三頁（図43）

月柿の庭[ママ]の隅の木に
からまりついて居たやぶからし

十月二十日描く

図43　五巻　四二―四三頁

第六巻

中表紙

思いつくままに（六）

四十八年十月二十日より
〃　十二月二日まで

六巻　二―三頁（図44）

中津川の山の家の柿（しぶ柿）

柿の色がきたなくなったが（これは失敗）
赤いいろは　のりがしみると必ず色が悪くなるのを知って居たのに

十月二十日作之

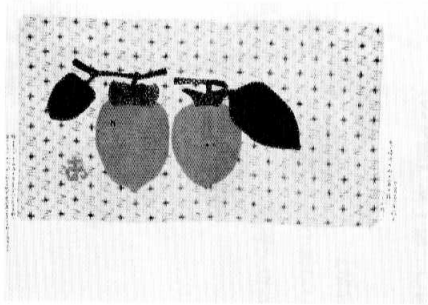

図44　六巻　二―三頁

六巻　四―五頁（図45）

先日
飛騨高山で
買った（ひょうたん）
まだ薄みどりのままのがある

十月三十日　貼之

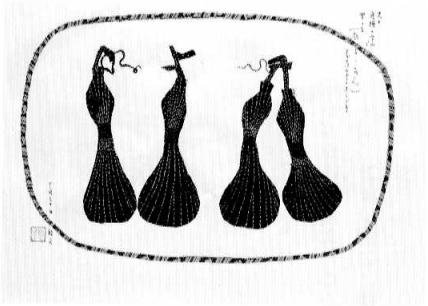

図45　六巻　四―五頁

六巻　六―七頁（図46）

十一月一日
山茶花が一ぱい庭に咲く
あたたかい日、千瑳子[22]が届けてくれた
『かれい』36㎝もある大きなもの
刺身にして食べる
美味しかった
（魚に使ってある布　京都の東寺の露店で昨年の秋買ったもの）
刺身におろした後をモデルにして

十一月二日貼之

六巻　八―九頁（図47）

文化の日
庭の柿を写生

あ

六巻　一〇―一一頁（図48）

三つ葉を切った根を水にさして
六日目
富有柿
文化の日
夕食后食卓の上で写生
葡萄

あ

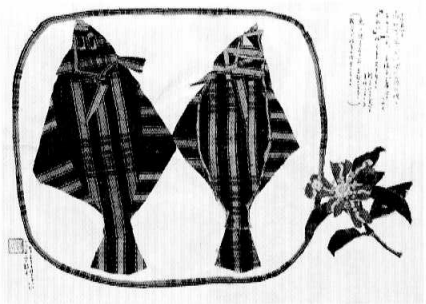

図46　六巻　六―七頁

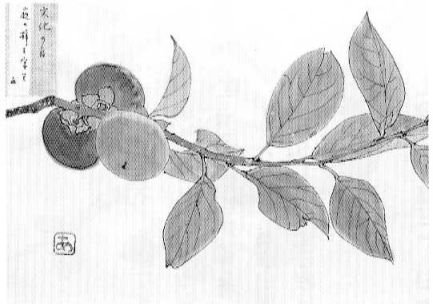

図47　六巻　八―九頁

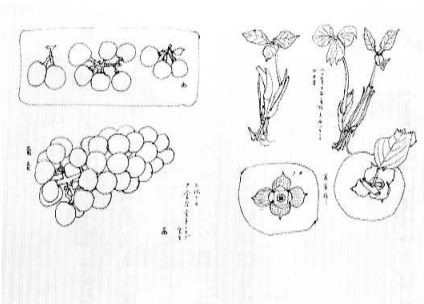

図48　六巻　一〇―一一頁

六巻　一二―一三頁（図49）

十一月十三日　綾の会の総会に
私の話を聞きたいとの会員の人たちの
希望とか。何を話そうかと一日中
そんなことを一人思って居る

十一月四日貼之

図49　六巻　一二―一三頁

六巻　一四―一五頁（図50）

『林檎』
四日（日曜日）
高山の朝市で買って来たと
五日に　もと子さんが届けて下さったもの
葉が取れない様に大事に大事に
持って来たのよ　と……

葉がしおれかけた
七日貼之

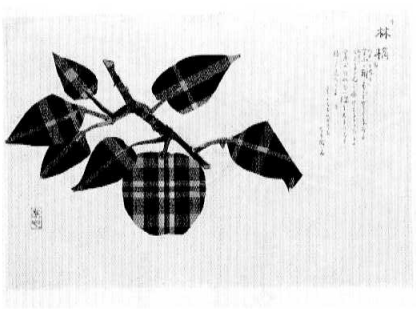

図50　六巻　一四―一五頁

六巻　一六―一七頁（図51）

『蜜柑』
昨日のうちのけいこに
加藤美代子さんがモデルにと
持って来て下さったもの
これに使ってある紙は
生田ひろ子さんからのおくりもの

十一月八日貼之

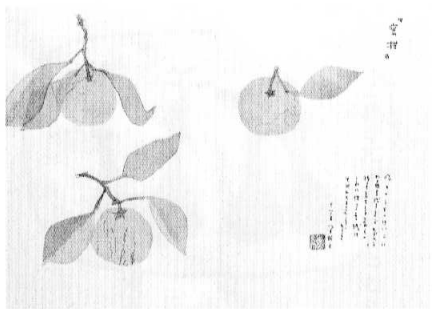

図51　六巻　一六―一七頁

六巻　一八―一九頁（図52）

『赤菜[23]』
これも　もと子さんが
高山の朝市で買って持って来て下さったもの
今日まで大事に
保存して置いて今日描く
少し新鮮さが無くなって居るけれど
（貰って四日目）

十一月八日　写之

『朴葉の上に
赤かぶらと
小さな大根』

六巻　二〇―二一頁（図53）

『阿けび』
（昨年の九月に作ったもの）
台は手摺き紙（岐阜恵那郡坂下にて求めたもの）

十一月九日　ここに貼る

阿けびに用いてある紙は
阪野年子[24]さんが染めたもの
阪野さんのこうして染めたので
私の羽織を作って貰ったのが　四枚ある

六巻　二二―二三頁（図54）

『ざくろ』
伊勢型紙の紙を使って。

この紙は五年位前　鈴鹿の市長さん杉本[25]さんからいただいたもの
伊せ型紙は美濃紙三枚を柿渋で貼って、
三日間から一週間位　おがくずでいぶす（四四・一〇・一二・　名古屋テレビで知る）

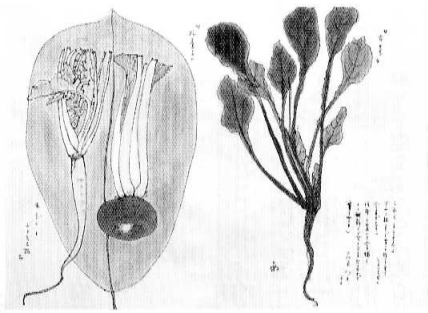

図52　六巻　一八―一九頁

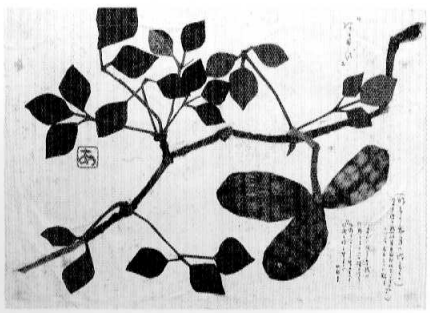

図53　六巻　二〇―二一頁

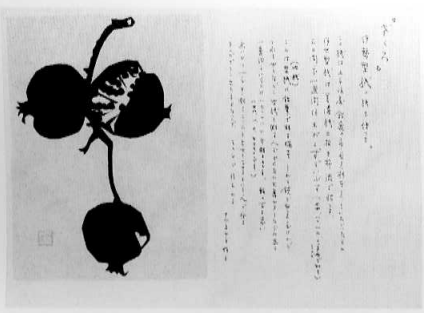

図54　六巻　二二―二三頁

これは型紙（地紙）に鉛筆で形を描いて　それを鋏で切ったのだけれど
これをやりながら型紙を彫る人がどんなに大変かをしみじみ思う
一番細かいものは一センチに十本彫るとのこと。頭の下る思い
（四八．一．二．ＮＨＫテレビより）
近い内に一度その彫るところを見せて下さるという人が居る
テレビでしか見たことがないので、その日が待たれる

十一月十日作之

六巻　二四―二五頁（図55）

『里いも』

十一月十一日貼之
（午前）

十一月十一日貼之
（午后）

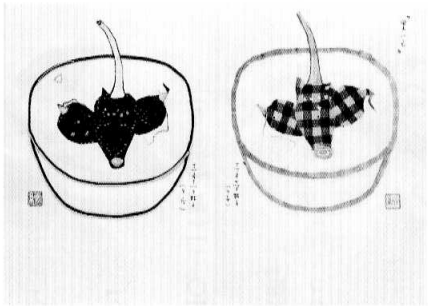

図55　六巻　二四―二五頁

六巻　二六―二七頁（図56）

昨日　神戸の近代美術館にて　ジャコメッティ展[26]を観て感激……
（こよりを使って）

十一月十八日　作之

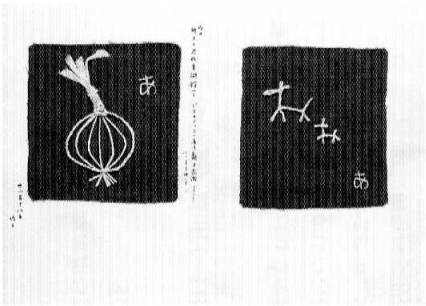

図56　六巻　二六―二七頁

六巻　二八―二九頁（図57）

『蓮根』
同じ布の
裏と表を
使って―

夫が街で　昨日見つけてくれたもの

十一月二十一日　作之

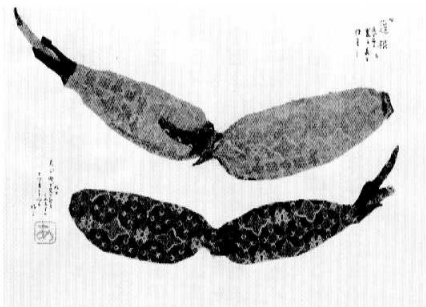

図57　六巻　二八―二九頁

六巻　三〇―三一頁（図58）

『ほしがき』

蓮根と一しょに　これも主人が買ってくれたもの

十一月二十二日貼之

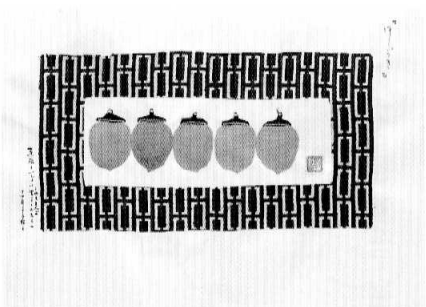

図58　六巻　三〇―三一頁

六巻　三二―三三頁（図59）

三日前
名古屋に出張で来た
桂が持って来てくれた
高山の紅菜??

これを描いて居る最中
いろんな用事で立ったり
座ったりしたので　気に入らない
ものになる

十一月二十八日　描く

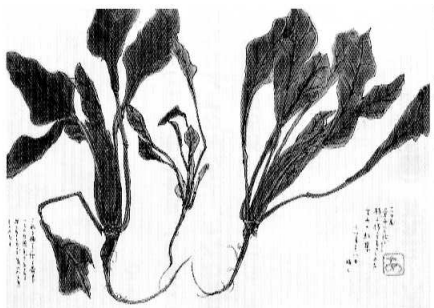

図59　六巻　三二―三三頁

六巻　三四―三五頁（図60）

美しい　いちごをいただいたので
どの様な布で作ろうかと思いながら
ふと　一ノ宮の森さんからいただいた古い布を
思いだし、箱の中から取り出して見る
江戸時代まで行くのではないかと思われるものがある
この作品の中にも　そんなものがあるのぢや
ないだろうか
いちごは　久し振りに尋ねて下さった
田口久枝さんが下さったもの

十一月二十八日

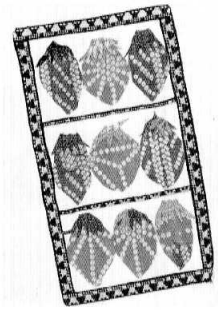

図60　六巻　三四―三五頁

六巻　三六―三七頁（図61）

これも　一の宮の森さんからいただいた布で

十一月二十八日

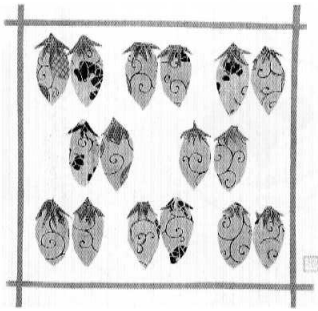

図61　六巻　三六―三七頁

六巻　三八―三九頁（図62）

『茄子』

ずつと前　作ったもの。ある模様を生かしたのだけれど、染の様ですねと
或る人に言われた　そのものずばりなので　ちょっと気にはなって居たのだけれど
こんなことをして見るのも、『布と遊ぶ』のこの頃の私には、それもいいのだと
思ったりする

十一月二十九日貼之

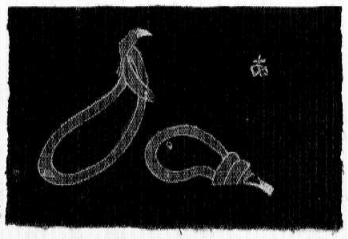

図62　六巻　三八―三九頁

六巻　四〇—四一頁（図63）

（豊臣秀吉の征韓の折侘助というものが　持ち帰ったという椿）
『侘助』
萩本さんのお宅に咲いたのを
いただく

十一月二十九日　描之

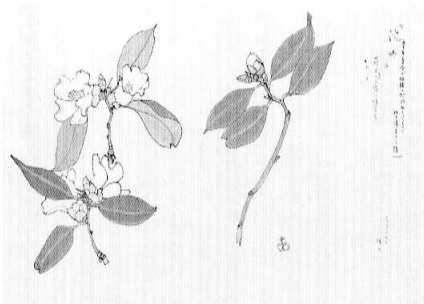

図63　六巻　四〇—四一頁

六巻　四二—四三頁（図64）

朝の食事が終わってふと見ると
食卓の『侘助』が美しい
あわたゞしい中で描いたので
うまくかけなかった

十二月一日　あ

今日の新聞紙のグラビヤを使って

十二月二日　貼之　あ

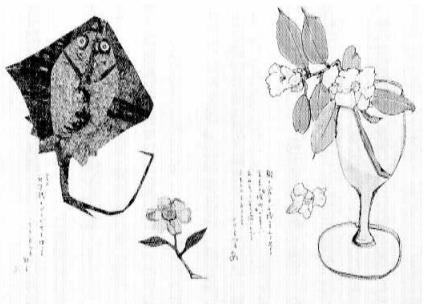

図64　六巻　四二—四三頁

註

1　日本を代表する新劇の女優（1906―1997）。文学座の中心として活躍するとともに、小津安二郎監督作品をはじめとする映画にも多数出演。杉村が寄贈した布で綾子が制作した《思い出の布（屏風）》（1953年）などを所蔵していた。

2　夜がらす山荘　長多喜。岐阜県中津川市の高台に建つ、古民家を用いた割烹旅館。閑静な佇まいを文人墨客も愛でた。

3　岐阜県恵那郡坂下町。現岐阜県中津川市坂下。

4　ヌメリスギタケモドキ。梅雨から秋にかけ広葉樹、特にヤナギやハンノキ類の枯木に束生する。

5　宮脇夫妻の愛犬。夫晴の作品にも描かれている。

6　愛知県立大学教授。英米文学研究、サンタクロース研究で知られる。

7　佐藤多禾子。宮脇家で長い間家事手伝いをし、綾子を助けた。

8　「中華人民共和国出土文物展」（会期：1973年8月11日―9月30日、会場：京都国立博物館）。

9　宮脇夫妻の孫。長女千磋子の娘たち。

10　京都国立博物館。

11　江戸時代から続く京都の高級京料理店。

12　（株）中村ちんぎれ店。京都市東山区にある明治創業の古裂屋。江戸時代のものを中心に珍しい布を扱うことから「珍裂屋（ちんぎれや）」と呼ばれる。

13　愛知県半田市からけいこに通う弟子のひとり。

14　洋画家佐分眞（1898―1936）の姪。

15　愛知県一宮市。

16　岐阜県高山市で毎日行われる朝市。陣屋前広場と宮川沿いの2か所で開かれる。

17　宮脇夫妻の長男、三人姉弟の第二子。

18　綾の会第一回展から出品していた最古参会員。「綾の会」山添グループ。

19　岐阜県加茂郡八百津町久田見。

20　註6を参照。

21　岐阜県中津川市にある宮脇夫妻の別荘の庭のこと。

22　宮脇夫妻の長女、三人姉弟の第一子。

23　日野菜の別称。

24　名古屋市在住の染色家。㈳日本新工芸家連盟会員。

25　当時の鈴鹿市長杉本龍造（在職：1946―1982）。

26　「ジャコメッティ展：現代彫刻の巨匠」（会期：1973年9月1日―11月25日、会場：兵庫県立近代美術館（現兵庫県立美術館））。

27　中国原産のアブラナ科の野菜。紅菜苔。和名は紅菜花（べになばな）。